絹谷幸二芸術賞

40歳以下の才能あふれる美術作家を顕彰する「絹谷幸二芸術賞」（産経新聞社、絹谷幸二美術財団など主催）は、産経新聞の創刊90周年を記念してことしから始まり、第1回の大賞は近藤亜樹さん（36）に決まった。奨励賞には大小島真木さん（36）が選ばれた。先月28日には東京・千代田区のサンケイプラザで発表と授賞式が行われ、それぞれが喜びを語った。（正木利和）

顕彰は絹谷幸二さんが担当

大賞　近藤亜樹さん

こんどう・あき　1987（昭和62）年、北海道生まれ。東北芸術工科大学大学院修了。強い線と色彩でエネルギッシュな絵画を生み出している。

近藤亜樹《星、光る》2021年 acrylic on panel 227.3×545.4cm Copyright the artist, Courtesy of ShugoArts, Photo by 奥山茂俊

授賞式のあと、かみしめるように喜びを語った。「賞とは無縁で、表彰式に出たのの初めて。おめでとうといわれるのは本当にうれしいものですね」

それに立つスピーチでは万感の思いを口にした。

「生きているといろんなことがあって、絵がないと生きられなかったと思うこともたくさんあった」

北の街・札幌で、絵を描きながら育った。夏はまっすぐ続く路上、冬は真っ白い雪上…。娘を思って母は出勤前、自由に描けるようにとテーブルに模造紙を置いてくれた。それに応えるように美術科のある中学、高校へ進み、山形の東北芸術工科大へと進学する。

大学時代、絵画がいやになってインスタレーションに走ろうとした。しかし、現代美術家の宮島達男氏が「そんな自分を」と言ってくれたおかげで絵を再認識できた。

「絵には夢があり、なんでもできる。飛んでいる鳥も止まるし、温かさも冷たさも表現できる。その世界に入れば自由なんです」

強い衝撃に心が折れそうになったこともある。東日本大震災で真っ暗な海に赤い炎が浮かんだ写真を新聞で見た。それは、津波で流された家が火事で燃えている写真だった。「私の感情が止まりました。札幌の実家にもどって食事しているときも、自分は被災地から逃げ帰った、という罪悪感で涙が出た。絵をやめてボランティアをしたほうがいいのではないか、と…」

結婚後、妊娠している最中に夫と死別。記憶を失うほど大きな悲しみだった。「失った記憶、死んでいる心をよみがえらせるために、私は絵を描いた。絵があったから、私は今、生きているんです」

悲しみを乗り越えた彼女が今後、絵画で表現しようとするものは。「私が描くべきものは希望だと思っています。パンドラの箱に残されたあの希望を」

奨励賞　大小島真木さん

おおこじま・まき　1987（昭和62）年、東京都生まれ。女子美術大学大学院修士課程修了。世界各地で滞在制作、生と死の間の表現を追求する。

インド、ポーランド、中国、メキシコなど世界各地で滞在制作を行ってきた。来年3月からは文化庁からの派遣で再びメキシコに渡り1年間、現地の文化やアートを学ぶのだという。

実は、文化人類学に興味を持っている。「メキシコは芸術家の肖像がお札に使われているほど、芸術が根付いています。そこで、南の先住民などをリサーチしたい」と胸を躍らせる。

小さなころから所かまわず絵を描いていたという。家には寝たきりの祖母がいた。「話しかけても反応はないけど、確かに人として生きているのです」。人の生死のリアリティーをいつも突き付けられた。

さらに後年、18人乗りのフランスの海洋調査船に乗り込んで生活しているときに、クジラの死骸に遭遇した。「その死骸はたくさんの生き物に食べられていたんです。それをもとに制作をしたりもしました」

スケールの大きな作品「l'œil de la baleine　鯨の目」などは、彼女が体験してきた生と死とそのあわいをテーマに描かれた。「この世に生きるとはどういうことかずっと考えてきました。これからも想像力を働かせた芸術を見せたい」

賞はそのためのパスポートになるかもしれない。

生きることは描くこと

想像力働かせた芸術を

大小島真木《同じさの補遺として — As a supplement to sameness》（Size：h161.7×w111.7×d3.2cm）Year 2023©Maki Ohkojima

選評

生命を謳歌し元気配る

絹谷幸二（洋画家）

パンデミックに国際紛争など苦しい時代のなか、近藤さんは色彩を使って生命を謳歌する作品を制作している。人々の幸せを思い、元気を配るような作品は、まるで私の同志のよう。この賞が彼女の次の励みになればと願う。

大小島さんは、世界に目を向け、生きとし生けるものと語り合いつつ仕事を進めている素晴らしい人。芸術というものを心底、理解して生活しながら、絵を描いておられる。

これからの日本をしっかり立つ若い人を育てたいと始めた賞なので、２人には大いに期待している。

大胆な構図と色彩　圧倒

島敦彦（国立国際美術館館長）

今回、推薦者70人余りから68人の候補が挙がったが、驚いたのは近藤さんを推薦する人が５人もいたということ。多数決で決めるわけではないが、その作品の大胆な構図と色彩に圧倒され、満場一致で大賞に決めた。絹谷氏のエネルギッシュな作風にも通じており、第１回の大賞にふさわしいだろうと思う。

大小島さんは遠くから俯瞰（ふかん）するような視点から地球環境をダイナミックにとらえ、世界各地でないがしろにされつつあるかけがえのない命を大切にした作品を描いている。そこには宇宙的な広がりも見える。

タフな線　野太い生命感

建畠晳（埼玉県立近代美術館館長）

受賞スピーチを聞いて、２人とも３歳のころから絵を描いていたというが、絵描きというのはすごいなと改めて感じた。68人の候補のなか、２人は早い段階で受賞が決まった。

近藤さんは華麗な色彩もさることながら、タフな線に野太い生命感がある。画家の腕力が印象的な作品のように感じられるのである。一方、大小島さんは緻密な絵という印象がある。どこか不穏なイメージも漂っている。

生命感と細やかさは、絹谷氏の絵画の２つの側面。その意味で第１回にふさわしい選考になった。

推薦者（74人）

青木加苗、飯田志保子、五十嵐卓、石倉敏明、石崎尚、伊藤圭一郎、伊藤貴弘、岩波昭彦、植松篤、内田真由美、内呂博之、内海潤也、大下裕司、O　JUN、岡里崇、岡本梓、勝山滋、加藤義夫、神山亮子、木藤野絵、楠本智郎、黒川公二、慶野結香、小勝禮子、小金沢智、後藤結美子、小原真史、近藤由紀、坂元暁美、沢山遼、渋沢和彦、清水靖子、下村朝香、尺戸智佳子、新藤淳、鈴木俊晴、角奈緒子、妹尾綾、高田彩、瀧上華、竹崎瑞季、立花由美子、筒井宏樹、土蛯美由紀、鳥羽都子、中井康之、中尾英恵、中西摩、中山摩衣子、野地耕一郎、野田尚稔、野中祐美子、林寿美、原舞子、樋泉綾子、藤川悠、古川文子、保坂健二朗、堀元彰、桝田倫広、真武真喜子、三井知行、森啓輔、森千花、柳沢秀行、山口裕美、山下裕二、山田志麻子、山本淳夫、山本麻友美、横山由季子、吉川神津夫、米田晴子、和田浩一（敬称略、五十音順）

若い美術家支援

日本を代表する洋画家で令和３年に文化勲章を受章した絹谷幸二氏が若手美術作家を支援したいとの思いから創設。産経新聞創刊90周年事業として実施している。全国の美術館学芸員、美術関係者など約200人に40歳以下の画家の推薦を依頼。推薦状をもとに絹谷幸二氏、島敦彦氏、建畠晳氏の３人による審査で、大賞１人、奨励賞１人を決定した。

絹谷幸二芸術賞の公式サイトはこちらから

【主催】絹谷幸二芸術賞実行委員会、産経新聞社、一般財団法人絹谷幸二美術財団
【共催】チャーム・ケア・コーポレーション
【協力】サクラクレパス